

平成26年度公文書館講演会

講 演 録

日 時：平成26年11月29日（土）午後2時開会
場 所：札幌市公文書館 3階 講堂

はじめに

きょうは、札幌の歴史の中でも、札幌の街づくりの最初のころのお話をしようと思います。もしうまくいくと、来年はこの続きの話をしていくことを考えています。きょうは2時間ほど、おつき合ください。

講演が始まる前にスクリーンで地図をご覧いただきましたが、札幌の街並みの地図を新しいほうから古いほうへ遡ったものです。こういうものを見てみると、碁盤の目がどんなふうに広がっていったか、さかのぼるとそれがなくなるとか、札幌の街の変遷がわかるとと思います。本当は年代がしっかりわかるようにしておくといいのかもしれませんが、まだそこまで加工はしていませんが、来年はそんな地図になっているかもしれません。

講演前にご覧いただいていた地図の最後の2枚が江戸時代のものでした。江戸時代のいつごろぐらいから札幌に和人（日本人）が住むようになったのか。アイヌの人たちはかなり以前から住んでいたらしいです。記録としては、アイヌの人たちは何時頃からというのははっきり出てきません。一応、古い記録としてあるのは、1669年にシャクシャインの戦いがあり、そのときに津軽藩の密偵が西地まで来て探索をしたときに、現在の札幌あたりに沼があり、「狄（テキ）」の村があるとありました。「テキ」というのはアイヌの人たちのことですから札幌の辺りにアイヌの人々がいたという報告があるくらいです。

今回は、札幌に人が住み始めるというより、街づくりを始めるということで考えていこうと思います。

札幌に街づくり

明治2年11月ぐらいから札幌に街づくりを開始することになり、その主任官が開拓使の判官である島義勇で。

ところが、島判官は、ここへ来て何も考えずに作り始めたというわけではありません。なぜこんなところにつくったのか。当時の札幌は、原野でした。その原野も、大密林地帯なのか、まばらに木が生えていて茅野疎林地帯という程度のところなのか、実は余りはっきりしません。史資料の中には、現在の札幌の中心部が、茅野地帯だったということを示すものがあります。茅が生えているように描かれている絵図面も残っていますが、なぜ札幌の地が選ばれたのかということからはじめようと思います。

島開拓判官の札幌本府建設計画	
	2014年11月29日
1. 札幌が選ばれた理由と経緯	
近藤重蔵	イシカリ川：ユウフツ川、トカチ川、モンベツ川、ソウヤ川、テシオ川、マシケ川、ルルモツベ川へ連なる
	北海道の地図から
石狩要害論	イシカリ川筋カバト山、タカシマならびにオタルナイの奥、サッポロの西テング山之辺
	①
	〔新札幌市史〕第一巻通史一
松浦武四郎	札幌豊平のあたり
	②
島義勇の詩や書翰より	③④
「札幌の昔話」より	⑤⑥⑦
2. 島判官の計画図『石狩国本府指図』	
	『石狩国本府指図』から見る街の構造
	⑧
	石狩国本府（役所の本庁舎）、役邸、学校・病院や諸役所
	本府の周りに堀、本府の裏に土居と堀 防衛的？
	⑨
	土居のある空間、庶民の街本町
	江戸に似ている？
	⑩
3. 島判官の計画図『石狩大府指図』	
	役所と役人・庶民の街である中心街、周囲に村々、お宮
	⑪
	それらを結ぶ道、石狩や銭函へ通じる道路、
	さらに「千歳江之道」、「室蘭江之道」、「有珠江之道」
	町と村との関係 → 町の商工業と村の農業
	移民を募集して村へ入植、田畑開墾入夫の募集
	⑫⑬
4. 開拓使の政策一道都整備と殖産興業政策一	
	札幌本道の開削（函館～森～室蘭～札幌～小樽）、本願寺街道開削
	⑭
	諸役所（各局・各課）の整備
	⑮
	諸工場の設置 諸村の農業生産物の購入
	⑯

レジュメ

レジュメを見ていただきますと、札幌が選ばれた理由と経緯という題名をつけていますが、札幌のあたりを何らかの基地にしようとか、中心地にしようとかということは、いろいろ本を読んでもみると、18世紀の末ぐらいからという話になるようです。

その話は、『開拓使事業報告』という本に出てきます。明治の初めに北海道を開拓するためにできた開拓使という役所がありますが、その事業報告書が出ていて、その中にほんの1行の半分ぐらい書いてあります。

近藤重蔵

その次かどうかわかりませんが、札幌をクローズアップしたのは、皆さんも名前をご存じの近藤重蔵です。近藤重蔵が18世紀末から19世紀初めぐらいに蝦夷地の探検をしますが、そのときに札幌をクローズアップしていきます。『新札幌市史』第1巻から近藤重蔵の意見を紹介します。

近藤重蔵が札幌のあたりを注目していくのには、一つには、石狩川があったようです。

資料①は北海道の地図です。近藤重蔵が注目したのは石狩平野ないしは石狩川です。今でこそ、石狩川、石狩平野と言っていますが、石狩川という言い方は近藤重蔵のころには既に使用されていました。

石狩川というのは、石狩平野のど真ん中あたりを流れていまして、札幌の近くの石狩湾のところから遡って、島の中央部ぐらいまで遡る川ですね。



資料① 北海道の地図

この川に着目していきますと、旭川がある上川盆地にも石狩川が流れています。上川盆地からいろいろな方向に流れを遡ると、例えば北側へ行きますと、小さな丘陵か山の縁があって、それを超えると天塩川に出会います。それを北側に下っていくと、稚内のすぐ近くの天塩平野まで行きます。そしてもう一つ、上川盆地から東のほうへ行けば、オホーツク海へも出ることが出来ます。

今の滝川のところから空知川という支流を遡っていくと、富良野とか十勝岳の麓あたりに出て、さらに遡り稜線を越えると十勝川があって、十勝川も多少下った後、途中からまた遡ったりしますと、阿寒のほうへ行くことが出来ます。阿寒のほうへ行くと、根室のあたりまで行く川の上流に出ます。川伝いにいろいろなところへ行けるのです。このように川を交通ルートとして見たようです。

当時の近藤重蔵の書き物には、レジュメにあるようにいろいろな川の名前が登場するようですが、今のどの川に当たるのか判断するのが難しい場合もあります。石狩川と天塩川と十勝川は恐らく今と同様だろうと思いますので、その三つの川をたどってみました。

石狩平野のどこか、石狩川の沿線のどこかに何らかの本拠地をつくっておくと、例えばロシアなどとどこかで何か起こったというときの交通ルートないしは物資の輸送ルートを何とか確保できるというように考えたのだろうと思います。

今の日本で、川を遡っていく運送ルートは余り考えられないですが、当時の北海道を考えてみると、今のようにある程度歩くとまちがあるというときではないです。大密林の原始林が何キロも何キロも続いているという状況です。そのため川というのは交通ルートとしては利用しやすいのです。

私に教えてくれた先生の話によると、松浦武四郎なども、真冬に探検をするのが多いようです。真冬のほうがいいのだそうです。夏の間は原始林の中で見通しがきかないのです。冬になって木の葉が落ちてくると、それなりに見通しがきくというので、探検していくルートを確認しやすいそうです。

それに加え、例えば、石狩平野というのは大湿地帯でした。特に、札幌の北区とか東区、おおむね函館本線の北側が大湿地帯であったと言われています。そのように描かれた絵図面もあります。松浦武四郎の探検の紀行文を読んでいますと、その当時で3月の末ぐらいでしたか、定山溪から下りてきて、今の豊平ぐらいのところまで来て、そこから真っすぐ石狩の河口に行くのが一番近く、真冬だと真っすぐ突っ切って行けるのですが、雪解けが進んでくると雪の下がぐずぐずに下手すると埋まってしまうということがあったようです。

結局その時は、真っすぐ石狩へ行くのではなくて、山沿いに銭函へ行って、銭函から石狩湾の海岸線を石狩へ行くというルートを通っています。そんな意味も含めて考えると、冬の探検というのが当時の蝦夷地の場合は楽だったわけです。でも、いろいろな紀行文や探検記を見てみますと、真冬ばかり探検していたわけではなくて、ちゃんと夏の間にも探検している人もいます。

近藤重蔵の話に戻りますが、川を中心に考えてみて、交通ルートとしての位置づけを考えてみたのですが、さらに絞っていきまして、どういうところを北海道を経営するときの中心部にしたらいいのかと考えました。それを、「要害の地」という言葉で表現しています。要害というのは、攻めるのには難しく、守るのにはたやすいという意味なのだそうです。

レジュメにその場所が3ヶ所上げてあります。「イシカリ川筋のカバト山」、「タカシマならびにオタルナイの奥」、「サッポロの西テンゴ山之辺」の3ヶ所です。樺戸辺、小樽辺、札幌辺が上がってます。その内札幌について考えましょう。

当時の札幌は、今の東区の北十何条の東十何丁目辺りの伏古川周辺から今の中心部を「サッポロ」と言っていたようです。近世の資料では、「上サッポロ」と「下サッポロ」と言われている地域がおおむねそのあたりを指すだろうと言われています。また「テンゴ山」を天狗山ということでしょう。

「サッポロの西テンゴ山」と言うのですが、今の東区と想定すると、西のほう

にある天狗山とはどこを指すのでしょうか。銭函には天狗山があります。それ以外にも、天狗山という名前だけでなく天狗の鼻のように見えるようなぼこんと盛り上がったような山を想定すると、藻岩山や三角山もその候補に入ってくる可能性もあります。しかし『札幌百年のあゆみ』という、創建100年記念のときに札幌市が編纂した本によると、定山溪のほうの天狗山のあたりらしいという絵図面があるそうです。いろいろ探したのですけれども、その絵図は見つけることはできませんでした。

そこで定山溪のあたりを見てみますと、今の定山溪ダムの脇に小天狗岳というのがあり、その西側には天狗山があります。もしかするとそこなのかもしれません。正確なところはわかりませんが、どちらにしても石狩平野近くに石狩川があってという地域を想定して、その近くを適地と考えていたようです。

松浦武四郎

その次に登場するのが、皆さんご存じの松浦武四郎です。

松浦武四郎は、簡単に言うと、「札幌（札幌）・樋平（豊平）の辺り」という言い方をしています。

松浦武四郎に言わせると、資料②（『蝦夷日誌 西蝦夷日誌』）の1行目にありますが、近藤重蔵は、先ほどの話につけ加えて、ツイシカリ川のあたりがいいのだと言っていると言っています。近藤重蔵のその話は本当なのか、『新札幌市』では見つけられませんでした。松浦武四郎はそう言っています。ツイシカリですので、松浦武四郎の時代には、豊平川は江別のほうまで流れていて、そこで石狩川に合流するのですが、そのあたりのことを昔はツイシカリ（対雁）と言っておりました。そこに「大府を置くことを書れしが」と書いてありますが、近藤重蔵はそんなことを書いていたようです。

ところが、その対雁に関して松浦武四郎は、何回か探検したときに、その地域のあたりを評価してみたころ、「春の融雪・秋の暴雨にしば〃〃往来して実験せしが、此地に府を開んには、禹王再誕の後ならで難かるべし」というわけです。

水の多い時期になったら余りよくないと言うのです。禹王再誕の後というのをいろいろ調べてみました。禹という人は、中国の歴代王朝の中で一番最初の王朝を「夏」と言うのですが、そのときに禹という王様がいて、いろいろな伝説があ

資料②

②

松浦武四郎 札幌豊平のあたり

一、文化度近藤守重（重蔵）の献策に、津石狩（対雁）に大府を置くことを書れしが故、余其地を春の融雪・秋の暴雨にしば〃〃往来して実験せしが、此地に府を開んには、禹王再誕の後ならで難かるべしとおもうがまゝ、其辺を探索するに、ツイシカリ川（一名札幌川・豊平川）三里を上り、札幌（札幌）・樋平（豊平）の辺りぞ大府を置の地なるべしとおもふゆへに、是を曾長ルビヤンケ（ツイシカリ）・オニヲマ（サツボロ）に再三審し、以て鎮将竹内（保徳）・堀（利照）・村垣（範正）の三名に言し置ものなり。

一、他日此札幌に府を置玉はゞ、石狩は不日にして大坂の繁昌を得べく、十里を遡り津石狩（対雁）は伏見に等しき地となり、川舟三里を上り札幌（札幌）の地ぞ帝京の尊ふ（と）きにも及ばん。左有時は、ユウフツ（勇弘）東海岸は北陸・山陰の両道にも及び、手宮・高島は兵庫・神戸の両港にも譬ふべき地とならん。また札幌より新道を切らば、白（有珠）・虻田・岩内の地も其日の便を得、東上川々筋より天塩・十勝の地にも何日か馬足を運ばさしめんと、依て此新道をして此巻首にするし置ものなりと。（吉田常吉編松浦武四郎『蝦夷日誌 西蝦夷日誌』第五編凡例）

余按ずるに、此辺に府を立まほしく思ふ。左候はゞ石狩を大坂とし、津石狩（対雁）を伏見と見、川筋三里を上り爰を府に定め、銭箱（銭函）・小樽をして尼崎・西宮とし、手宮に沖口を立て、後年兵庫・神戸（神戸）に比さんと。從此川虻田・有珠に道を開かば其弁理如何許ならんと。（同書第五編本文中）

る人らしいですが、中でも治水を手がけた王様だったそうです。その人がもう一度出てきて、きちっと治水事業がうまくいかない限り無理だよということを行っているわけです。松浦が考えるには、ツイシカリはだめだろうという話なのです。

次いで4、5行目に、先ほどのツイシカリから3里上って、「札幌（札幌）・樋平（豊平）の辺りぞ大府を置の地なるべしとおもふゆへに」とあります。ツイシカリよりももっと上へ上がった札幌のあたり、豊平のあたりで、今の札幌の中心部ぐらいから豊平川を渡った川向こうを指しているようです。

この近辺に住んでいたアイヌの人たちの意見を聞いたようです。「ルピヤンケ（ツイシカリ）とオニヲマ（サツポロ）に再三」つまびらかにしとすることは、あそこの地域はどうだろうかと詳しく聞いたということだろうと思います。それで、松浦は札幌・豊平辺がいいというふうに関心をして、「鎮将竹内（保徳）・堀（利熙）・村垣（範正）」の3人の箱館奉行に意見したわけです。

この後に、札幌とはどんなところかということ、京都と見比べていい場所であるということ、を述べております。

松浦はこんなふうに出てきたということですね。箱館奉行所は、石狩平野の札幌あたりを重要視していたようです。その辺は後からまた話をしようと思います。

島義勇

その次に出てくるのが島義勇です。松浦武四郎は幕末の話です。島義勇の場合は明治に入ってからで明治2年の話になります。島は、開拓使という役所の判官でした。当時は、開拓使には長官・次官がいて、その次が判官ですので、ナンバーズリーに当たります。そういう人が明治2年10月に銭函へ来て、その後、札幌に実際に住み始めるのは明治2年12月の3日か4日と言われています。その後、2月の9日か10日ぐらいまで札幌に住みます。その島がナンバーズリーとして札幌の地へ来て、札幌の街づくりを開始しますが、そのときに島は資料③（『島義勇漢詩集 北海道紀行詩』）にあるような詩をうたっています。

「遠く河水がゆるやかに流れ、一方の隅に山がそびえてある。ひろびろとした平原が千里の彼方まで続き地味は豊かである。北海道の各地へ道を通じるに便利であり、まさに首府をおくに最適である。いつの日か、おそらく世界第一の大都になるであろう。」という詩をうたったのです。

資料③

○島義勇の詩
河水遠流山峙隅
平原千里地膏腴
四通八達宜開府
他日五洲第一都

③
河水遠く流れて山隅に峙つ。
平原千里地は膏腴。
四通八達宜しく府を開くべし。
他日五洲第一の都。

（遠く河水がゆるやかに流れ、一方の隅に山がそびえてある。ひろびろとした平原が千里の彼方まで続き地味は豊かである。北海道の各地へ道を通じるに便利であり、まさに首府をおくに最適である。いつの日か、おそらく世界第一の大都になるであろう。以上原文は漢文である。原本は北海道大学附属図書館蔵『島義勇 北海道紀行詩』。読みと意味は北海道神宮奉賛会発行の『島義勇漢詩集 北海道紀行』上田三三生。）

札幌市役所の本庁舎のロビーに行きますと、手をかざして遠くを見ている様な島判官の像があります。何となくこの詩のイメージであの像をつくったのかなというふうに考えています。確かに、どこか高いところから俯瞰をしているような

霧囀の詩です。

実際に、島は、今の神宮のあたりぐらいのところに上って見たのだろうと思っています。一応、北海道神宮、前身は札幌神社と言いますが、札幌神社の場所をあそこに決めたのも島なので、神社の用地を見に行った時に眺めてみた時の話だったと想像しています。詩の意味合いを考えていきますと、こんな地域だから本府建設地としていいだろうということになるのでしょう。

今の札幌を見ますと、四通八達してきて、世界一ではないにしても、190万人も住むような大都市になりましたから、世界有数の都市にはなったと思います。今も日本で住みやすいまちの1番か2番か、常に上位に上げられるようなまちになりましたから、島の思惑どおりになっているのかなと思います。

こういう詩が残っていますから、おおむね松浦が最終的に言った札幌・豊平のあたりを近くの丘から眺めて、こんなところだからいいんじゃないかというふうに少しずつ限定されてきた地域を再評価していると捉えています。

次に資料④（『開拓使公文録』北海道立文書館5482）は、札幌市が持っている公文書ではありませんが、北海道立文書館が所蔵している開拓使の公文書の一部です。島が開拓使の業務に関することを東京にいる松浦武四郎など同僚に書き送ったものの一部分です。

資料の上の3行は、小樽はこの当時兵部省が管轄していたのですが、その小樽を開拓使管轄としなかったら、札幌に本府をつくってもうまいぐあいには行かないという意味のことを書いています。

資料の下のほうは、「今般府ヲ可取建場所ノ義ハ錢函ヲ去ル事四里ヨ手宮ヲ去ル七里又石狩ヨリ凡五里ヲ相隔四方広莫タル平原ニテ」という言い方で地勢のことを述べています。平原だったということです。その次には、松浦のように京都と比べないで、江戸と比較をして小樽の手宮を横浜にあてはめています。松浦は京都と比べてみましたが、島は江戸を想定しているみたいです。松浦は、京都を想定していたから京都をモデルにしたという意味ではないです。あくまでも地理的に位置づけるとこういう関係になるからということです。

次に「往々開拓ノ実功相立候上ハ必ス一都府ヲ成スノ勢ヒ顕然ト被存候」とあります。その後、松浦君の意見のごとく、ここを除くほかに求むべき場所はないと言っていますから、松浦の意見を取り入れて、この場所にしたいということを手紙で書き送っているわけです。日付は明治2年10月23日です。

島判官は、10月12日に錢函に着いていますから、それからちょっとたったぐらいのころです。

いろいろ島判官やその部下たちの行動を調べてみますと、この10日程の間に島本人がわざわざ錢函から札幌の辺りに来ているというようなことは、史料的に

資料④

④

島義勇の書翰（明治2年10月23日付）

小樽高島ノ二郡ハ開拓使へ被相附右ノ代リ地トシテ浜益厚田二郡ヲ兵部省へ被相附候様御尽力被下度左モ無之候テハ石狩国ニ本府ヲ立開拓ノ創業相立候見の絶テ無之候間迅速断然タル御所置有之度…

今般府ヲ可取建場所ノ義ハ錢函ヲ去ル事四里ヨ手宮ヲ去ル七里余又石狩ヨリ凡五里ヲ相隔四方広莫タル平原ニテ地勢最絶妙又手宮ノ如キハ実ニ御地ノ横浜ニモ相増リ可申往々開拓ノ実功相立候上ハ必ス一都府ヲ成スノ勢ヒ顕然ト被存候誠ニ松浦君御見込ノ如ク蝦夷地ノ内此所ヲ除キ又外ニ可求ノ場所絶テ無之ト存候（『開拓使公文録』道文5482）

は出てきません。部下が走り回って、札幌のあたりのことを、言われるとおりのいいところですよという報告をしたのかなと思っています。記録にないから島判官が来なかったと断定できるわけではありませんが。この史料が、札幌を少しずつ絞ってきて、ここのところに決めてきたという公文書です。

昔語り

次に史料⑤（『さっぽろの昔話 明治編上』みやま書房）は、老人の昔語りです。

札幌の地域を選んだというのは、先ほどの公文書的な史料とは別に、老人の昔語りとして残ってきた資料もあります。明治42年に当時の北海タイムス紙に「札幌区の成育」という新聞記事が載っていて、それは、明治の初めから40年ぐらい札幌に住んでいる老人たちに話を聞いて、それをまとめたものです。

最初のパラグラフには、北海道開拓の本拠地をつくろう

というときに、7世紀の阿部比羅夫の選んだシリベシ山のあたりがいいだろうという案もあったと書いています。これは、史料を見つけられませんでした。

もう一つは、石狩川筋でいきますと、石狩川の河口から遡ってくると、発寒川があたり、豊平川（当時は札幌川）があり、さらに上のほうに千歳川もあります。この昔話には、江別川とありますが千歳川のことでしょうか。本府建設地を江別にするか、豊平にするかの両論があって、江別に決まったという話になっています。そして当時の測量者が江別川と豊平川を誤ったため、島判官は札幌に建築することになったということです。この話は間違いだろうということは、先ほど見た近藤重蔵と松浦武四郎の話、そして島の先ほどの公文書と考えてくるとわかるとおもいます。先ほどの3人の説を並べて見た後では、札幌の地にスムーズに進んできているというふうに考えていいと思います。

この次に、松浦武四郎の話とかいろいろ出てきています。先ほど、私が発見していないと言ったのが、この山口さんの説です。天明5年と言いますので1785年、ちょうど田沼意次が政治をとっている最中です。田沼意次は、ドラマなどでは大体悪人に仕立て上げられますが、彼は、対ロシア問題が起こり『赤蝦夷風説考』といったロシア人の問題を強調した本が出始めたときに、それを敏感に感じて、蝦夷地経営をどうしたらいいかというのを考え始めた一人です。彼は失脚したので、途中で政策をやめてしまいましたけれども、その田沼の政策の中で探検した人が山口だそうです。山口高品といいます。またここにある近藤重蔵の話

資料⑤

⑤

「札幌区の成育（明治四十二年十月北海道毎日新聞）」

…島判官が何故に札幌に治庁を選んだかについては、種々の理由もありましようが、本道経営については開拓使庁においても種々の説が出て、阿部比羅夫の偉績を継いでシリベシ山ろくに治所を設けるをを良しとすというので議論が生じ、ついに石狩原野の要地を選ぶことになって、江別を可とするものと、豊平附近に定むべしというものと二説に分かれ、結局江別説が勝ちを制したるも、当時の測量者が江別川と豊平川とを誤って島判官は札幌に建築するに至ったとの説もある。

しかるに一説によれば、島判官は旧幕府時代に箱館奉行堀織部正の従者となって蝦夷地巡視の当時、すでに札幌を形勝の地として自らその経営に任じたともいうが、旧史記録によれば、天明五年幕府の吏員山口高品の諸氏が蝦夷巡行の時にこの地を相して国富の適地となし、近藤重蔵はすでに中土要害の地として、石狩川筋カバト山または浜通り高島小樽の奥、または石狩札幌の西テング山の辺を選ぶべきことを言い、松浦竹四郎の西蝦夷地日誌にも、府を札幌に置かば石狩は大坂となり、札幌は京都となり、手宮、高島は兵庫、神戸となるべきことを説いているが、早山翁の談によると、幕末有名な探検家間宮林蔵、最上十内の二氏が蝦夷地巡視の際に札幌を見て、古来ホオズキの繁茂する所と鳥の集まる所は、繁榮な市街地にあるとの俗説があるが、札幌はホオズキが多く茂っているから、将来大都会地たるべき所だと言ったと。

ちょっと聞くとはなはだ無雑作な話であるが、指揮者はいずれも札幌を以て他日十一州を統括経営する枢要の府とすることには同意見であつたらしいが、これを決行した島判官の苦心は容易の事ではなかつた。（河野常吉編『さっぽろの昔話 明治編上』みやま書房）

とか松浦武四郎の話は、先ほど見てきた史料そのままです。

この老人の話を出してきたことのおもしろいのは、最上十内（徳内）や間宮林蔵が札幌を見て、ホオズキの繁茂するところと鳥の集まるところは繁栄な市街地になるとの俗説があるが、札幌はホオズキが多いので将来大都会となるだろうと語ったと言うことです。実際にホオズキが多いのかどうかわかりませんが、当時の人たちは多いと思っていたのでこのような話も残るのでしょう。

最後には、「指揮者はいずれも札幌を以て他日十一州を統括経営する枢要の府とすることには同意見であつたらしい」と総括しています。

資料⑥（『さっぽろの昔話

資料⑥

明治編上』みやま書房）で

はこのような昔話があります。寺尾は、明治に島が札幌に入ったときには、その位置を間違えたと言っています。

⑥
「創成川の運送と角力と芝居小屋（寺尾秀次郎談 明治四十三年）
…安政三年堀織部正が札幌を過ぎ千歳に出て下場所に抜けたり、この時島義勇は食客として随行し来り、織部正が他日建都の地と見立てたるを知ったのである。しかし明治二年島が札幌に入り、建府の時はいささかその位置の間違えたとのうわさがあった。（河野常吉編『さっぽろの昔話 明治編上』みやま書房）

こ資料⑦（『さっぽろの昔話

明治編下』みやま書房）では、最終的な場所を

資料⑦

決めたときの話になるのですけれども、深谷という人の話です。この人は物すごい人で、数十回、新聞に載るぐらい、長々といろんなテーマの話をしています。実を言うと、私は余り信用していないのです。余りにもしゃべり過ぎです。街づくりを始めてから30年で、嘘をついているということではないと思うのですけれども、今まで見てきた昔話もそうなのですが、歴史研究が

⑦
「あれこれとあまりにありすぎて 深谷鉄三郎氏 明治三十一年七月二十七日
まず開拓使と創成川の運送」
…その時分は開拓使は判官の島義勇という方で、大抵判官は従四位ときまつていたものですが、この方だけは正四位でした。それでこの方はその時分、銭函の本陣にいたので最初にお出でになったのは少主典で林、富岡、長尾、阿部の四名でその内の林と長尾が新道掛で營繕が阿部と富岡です。
この四名が豊平に兼師としていた吉田茂八の小屋へ参って、ここを宿に致して地割を始めたので、初まりというのは、今の丸山神社のある所をコタンベツと言って志村鉄一と申す者に教えてもらって、この丸山から一里の所に府を立てるということに決まって地割を始めた。
しかるにその時分の地図にはりっぱに書いてあのですが、どこを測って見ても谷地ばかりで府を建てようという所がない。それで吉田茂八と、本村に在住していた函館奉行堀織部正の随行員の大工職の福原亀吉という者を案内にして、四名の少主典は毎日々々測量して歩いてようやく今の製麻会社の処へ、府を建てることになったのです。やはりこれとても谷地に係らないとはいえないので、半分は谷地に係ることになったのです。（河野常吉編『さっぽろの昔話 明治編下』みやま書房）

既に始まっていて、河野常吉や伊東正三という人たちが札幌の歴史研究をしています。新聞に載るときに、昔話を語る人たちが、そういう人たちから示唆を受けているような雰囲気が見られます。深谷は、『札幌の昔話』という本は上下2冊本となっているのですが、下巻のほうの5分の4ぐらいを一人でしゃべっています。余りにもしゃべり過ぎなので、河野常吉か伊東正三がコーディネートをしながら記事にしたのではないかと考えています。それでも、こんな部分があります。

島義勇について、大抵判官は従四位だけれども、正四位であつたというのですが、これは間違いです。島義勇が判官の頃は従四位です。「その時分、銭函の本陣にいたので最初にお出でになったのは少主典で林、富岡、長尾、安部の四名」だと。先ほどちょっと言いましたが、島は、銭函から札幌へそんなに来ていませんとお話をしましたが、島の命令で部下の4人は来ているので、この辺は、旅費とかを見ると彼らが来ているのがわかってきます。新道掛と營繕掛の二つの

掛の4人が来ています。新道は新しい道路をつくるでしょう、営繕は建築係とか建設係だと思っただけであればいいかと思えます。そのほか、吉田茂八のことが出てきます。「吉田茂八の小屋へ参って、ここを宿に致して地割りを始めたので、初まりというのは、」と、地割りを始めたのでというよりは、地割りを始めましたという言葉で、話し言葉ふうになっています。「初まり」というのは、街づくりの始まりという意味なのか、ないしは彼ら4人の仕事の初めはという意味でしょうか。さらに「今の丸山神社（現在の北海道神宮）のある所をコタンベツといって志村鉄一と申す者に教えてもらって、この丸山から一里の所に府を立てるということに決まって地割りを始めた」、こんな話になっています。

これが完全に正しいことかどうかわかりませんが、場所を決めていく順番でいくと、近藤重蔵が石狩平野のあたりがいいと言って、松浦武四郎が札幌・豊平あたりがいいと言って、島判官の部下たちが下調べをして、最後に島判官が丘の上から見て了承するという話の流れになっているようです。そうすると上官として事業の最終決定者は島判官ですが、実務者として実際に決めたのはこの部下たちということになってくるのでしょうか。

さらに「どこを測って見ても谷地ばかりで」といっています。建設予定地は札幌扇状地上ですから、この谷地は湿地帯という意味の谷地とともに、現在の札幌中心部は伏流水や川跡が多くありましたから、そういうものも含めた谷地なのかと思っています。そのため、後で見せる計画図があるのですが、その計画図どおり建設するにはどこの場所にしたらいいかといろいろ苦勞したという話です。

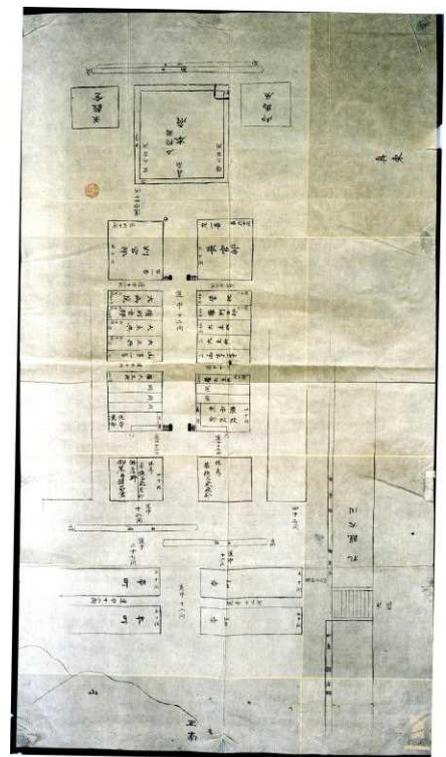
最後の3行目には、「毎日々々測量して歩いてようやく今の製麻会社の処へ、府を建てることになった」とあります。「今の製麻会社」というのは、明治20年に北海道製麻会社が北6、7条東1丁目に設立され、後に帝国繊維という名称になりました。それを「テイセン」と呼んでいたのですが、今はそこにその名をとったテイセンボールというのがあります。そのあたりに300間四方ぐらいの敷地のある開拓使の本庁の建物をつくらうとしたということです。

『石狩本府指図』の札幌

札幌に街づくりを始めたところの位置ですけれども、近藤重蔵ぐらいのころから話が少しずつ絞られてきて、松浦武四郎が絞って、島とこういう開拓使の役人が来てさらに絞られていったということです。

部下たちがいろいろはかって、どんなまちをつくらうとしたかというときのまちのモデルが、資料⑧-1の図面です。

これは『石狩国本府指図』（北海道大学附属図書



資料⑧-1『石狩国本府指』

館所蔵) と言います。北海道大学附属図書館が持っている地図ですけれども、北大の目録から言いますと、「いしかりのくにほんぷさしず」という読み方になります。これは、明らかに島がかかっているのがはっきりしているものです。この図面の左上の方に丸いものは「義勇」の印です。先ほど私が活字にした島の書翰をお見せしましたが、島が出した原本の書翰の末尾には島義勇の名前が書いてあって、この印鑑を捺してあります。「島」という印鑑ではなくて「義勇」という印鑑を捺しているのです。多分、これは筆でなぞった偽物というよりは、ちゃんと印鑑に見えますので、島義勇ないしは島義勇の家来が押した印鑑だろうと思っています。この図面は、島が書いたかどうかはわかりませんが、少なくとも島が持って歩くか、確実に何らかのかかわりを持った図面だということになります。

この図面は、あくまでも計画図ということですが、上のほうの文字がひっくり返っていますが、最初に言ったように上のほうが北に当たるので、こういう置き方をしています。上のところに「石狩国本府」と書いています。300間四方の敷地が幅1間の堀で区切られています。本府というのは、今の言葉でいくと本庁のことで、本庁の建物ということですが、その真正面に幅の広い空間があって、これは道路です。さらに、南のほうに幅広い空間があって、さらにその下に長四角が四つぐらい描かれております。

本府の前にある道路などを見ると、道幅12間、その他多くの道路に道幅12間と書いてあります。建物のブロックの長さや道路幅などを補正したものが資料⑧-2になります。以前には、本庁の前に大路があるので、平安京とか平城京をモデルにしてつくったのだという評価があったのですが、道路の幅などに合わせて作図し直すと、このようになり、中央の道路は、大路ではありませんでした。「本町」と書かれたところは、庶民のまちなのですが、庶民のまちなかを通る道路の道幅と同じということですから、真ん中に大路がある平安京などモデルにしたということにはならないことがはっきりします。

本府が300間四方になっています。300間四方の建物をつくるということではないと思います。そんな巨大な建物はできないでしょう。この敷地の真ん中に、当時、五稜郭の中にあつた元箱館奉行所の建物のようなものをつくる予定だったのだらうと思っています。

明治4年以降に開拓使の本庁舎を建て始めます。そのときは、五稜郭の中にあつた箱館奉行所を札幌へ移す予定でした。ところが、木材を運送してきて再建するのと、いろいろ経費計算をしたら、札幌周辺で製材して新たに建物をつくったほうが安いということが分かり、移築しないことになったのです。4年以降に本

資料⑧-2

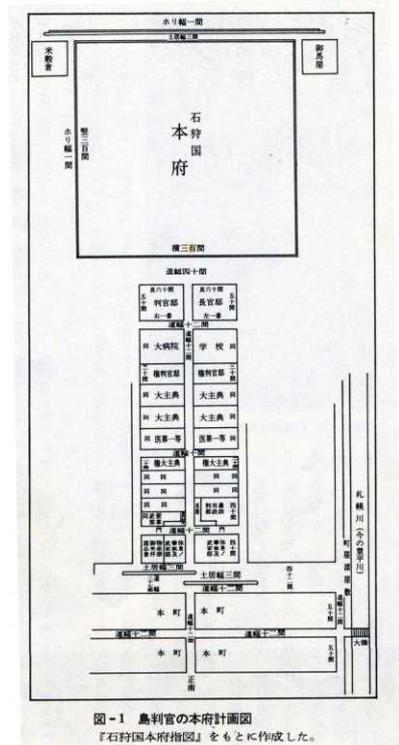


図-1 島判官の本府計画図
『石狩国本府指図』をもとに作成した。

庁舎を造ろうとしたときに、そういう建物を想定していますから、この島判官のときも函館にあった奉行所の建物のようなものをここへつくろうとしていたのだろうと考えています。

そのほか、中央の道路を挟んで、本庁の近くには長官邸、判官邸、学校、病院などを造り、長官・判官や大主典など役人の家がずらっと並ぶようにしています。さらに南側にはいろいろな役所の部署の名前が書いてあるところもあります。北部一帯は役所ないしは役人のまちということになります。その南には、42間という幅の空間があって、そこに細長いものが2条、互い違いになって置かれています。それには「土居」と書いてあります。土居を辞典で調べてみますと城壁などの意味です。私は、役人たちの町の南端に空間と土居があること、本庁の周りに土居と堀が造られていることから、江戸時代の城下町みたいな街をつくろうとしていると考えています。

もう一つ、42間の空間の南側には「本町」と書いてありますが、庶民の住むまちです。役人や役所のある部分と大きな空間を挟んで庶民の街があるという、江戸時代の城下町は大体そんな形をしていますので、そんな街が想定されます。

江戸時代の初期の城下町だと軍事的な意味合いが強くなりますが、平和な時代の二百何十年間を過ぎて、戊辰戦争は短い期間ありましたが、平和な城下町ということ想定すると、戦争を想定するよりは、もしかすると政治都市、今で言う道都、北海道の中心になる役所まちという性格の都市と想定できます。しかし対ロシアという当時の国際情勢を組み入れるとより軍事的な意味がまし、城下町的な性格が付与されます。

この図面もは、札幌川とあって、今の豊平川と書いています。真っすぐ南北に流れているように見えますが、実際は南西から北東側に流れています。その川に大橋と書かれていますが、後の実態から考えると、これは豊平橋です。そうすると橋の北西端は南4条になります。この道路は、図面上まっすぐに描かれていますが、西側は南1条通ですが、創成川を挟んで東へ来ると南へ曲がって南4条の豊平橋の辺りへ行く道路ということになります。この道路は、江戸時代につくった千歳越新道や札幌越新道呼ばれた道を絵図面にしたときに真っすぐ書いてしまったのです。

創成川が流れ、札幌越新道が通り、その交差点には後に創成橋がつけられます。今は「札幌建設の地」碑というのが置かれています。実際にここの交差点を



資料⑨『札幌より銭函迄新川の図』

開始の地だと島が決めたわけではありません。当時、安政4年頃に造られた札幌越新道と慶応2年頃に造られた創成川だけが、この辺りの人工物です。原野の中に人工のものが二つあれば、そこを目安にしやすいのだろうと思います。その後の歴史の検証を経て「札幌建設の地」碑というものを置く様な位置づけがなされていったわけです。

また、本府（本庁）がこの図面の北の部分に配置されています。現在では北6条か7条あたりの東西1・2丁目辺りになりますが、なぜここなのかを考えてみますと、こんな絵図面資料⑨『札幌より銭函迄新川の図』（北海道大学附属図書館所蔵）があります。

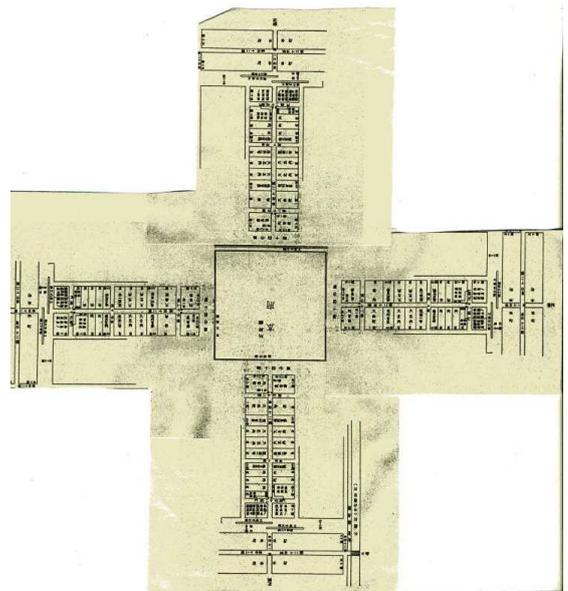
図中南端に先ほどの札幌本府があり、役所や役人の家があります。中央の南北に線が描かれ新川と書かれています。これが後の創成川のことです。本府の北側が黒く塗られています。これは谷地と書かれ湿地帯を指します。

この図面は、札幌本府と銭函を堀で結んで物資の輸送をしようとした計画図です。明治3年に創成川の麻生のところまでつくられます。その後そこから銭函まで水路を掘る予定だったのですが、実施されませんでした。この図のこの辺りが今の麻生で、その北側を南西から北東へ流れているのは琴似川です。今の北区、東区の鉄道線路の北側から西区、手稲区の函館本線の北側が黒く塗られていて、湿地帯だったということが示しています。つまり、この本府（本庁）の建設予定地の北側は湿地帯だったということです。昔話によりますと、やちまなこ（谷地眼）もあったそうです。

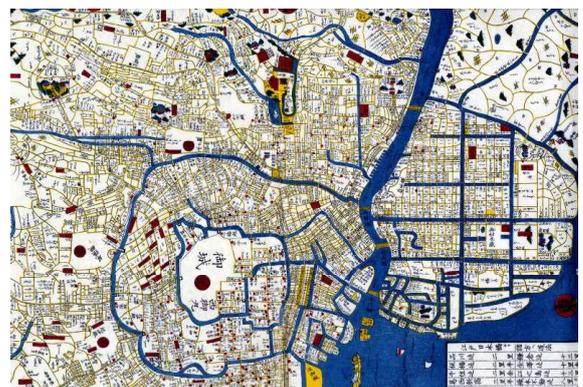
そのことを念頭に置くと、札幌での本府建設計画では、本府の背後の守りが想定されているようにも解釈できます。江戸も大阪も周りは海や沼の湿地帯の中にお城をつくっています。それと似たようなことです。

次には、『石狩国本府指図』後にどのように発展してどんな街になるのかということ推定してみました。資料⑩-1は『石狩国本府指図』をぐるっと回してみたものです。例えば、本庁がお城に当たるとして、お城の周りに大きな空間があり、そのさらに外側にも大きな空間があるということを考えますと、資料⑩-2は江戸時代中期の江戸の図ですが、お城があって、お堀があって、そのさらに外側にもまた堀があって、その外側に江戸時代の庶民のまちがありま

資料⑩-1



資料⑩-2

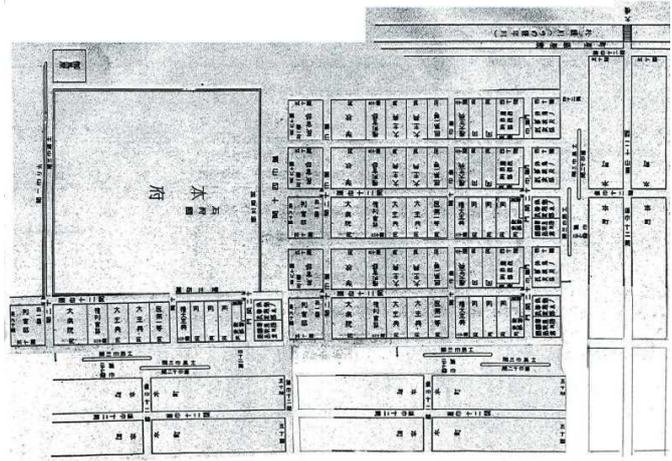


す。この図面でいくと、このあたりが浅草寺で、大体庶民の住むまちです。資料⑩-1のように仮定した図面を描いてみると、やはり城下町に見えるようです。そんなことを考えてみるためにつくってみました。

違う図面もつくってみました。⑩-3がそれです。

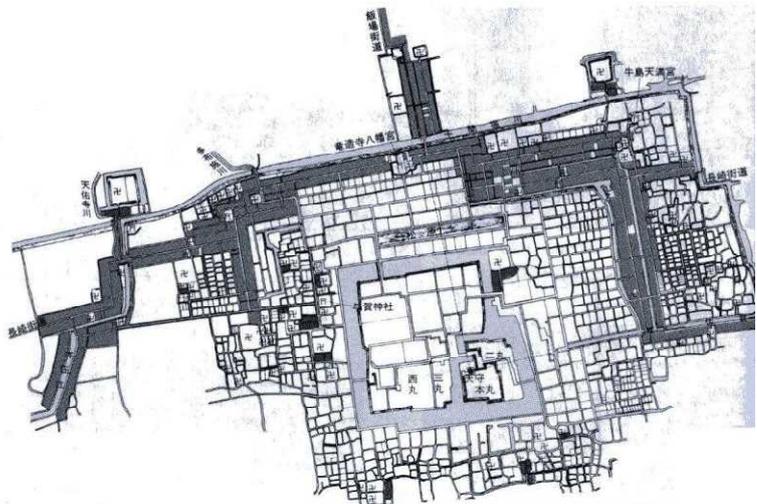
こ先ほどの指図の北側を左にして、官宅のブロックをふやすように描き、さらに庶民のまちの部分をつけ加えてみました。そうすると、今の札幌にそっくりになりました。南側には大通を挟んで庶民の街があり、大通の北側には役所街や銀行などのビジネス街があり、その北側に鉄道を敷き札幌駅を設けることになり、東の空地は創成川になるという感じでしょうか。島は、『石狩国本府指図』に役人街や庶民街を一例だけを描いていますが、さらに積み重なっていく街並みを想定していただろうと思います。

資料⑩-3



何でそんなことを言うかということ、この⑩-3は江戸でしたけれども、こちらの⑩-4は島義勇出身の佐賀です（『日本都市史入門 I 空間』東京大学出版会 1990年刊）。図中を見ると佐賀城、堀があり、黒い部分が庶民のまち、白い部分が武士の街です。模式図化すると『石狩国本府指図』は佐賀と似たような構造になっているのです。佐賀に限らず、城下町は大体似たような構造だと思えます。いろいろ調べて仮に図面をつくってみたりすると、こんなことも想定できるのと思いました。

資料⑩-4

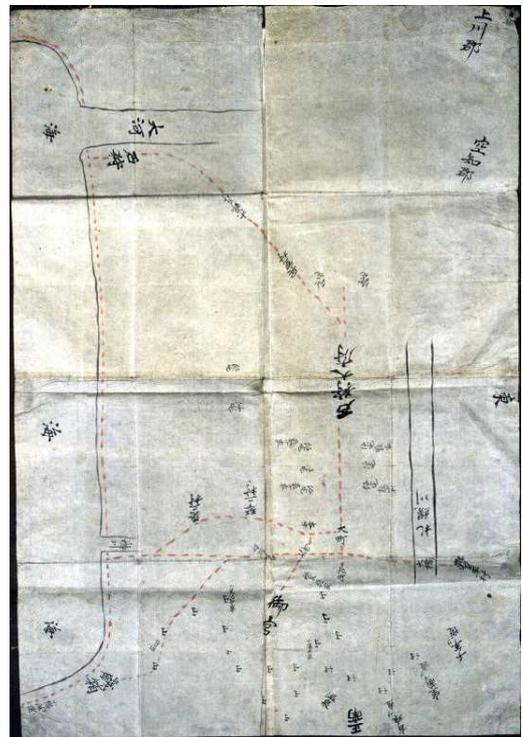


『石狩大府指図』の札幌

資料⑩は、これも北海道大学附属図書館が持っている地図で、『石狩大府指図』と言われていています。名前は皆さんのお手元の資料の下部に書いてあります。この図中に「石狩大府」とあります。資料⑧-2『石狩国本府指図』では「石狩国本府」と書いていましたが、同じことを指します。その上と下に「役宅」がいくつも書かれ、「数十軒」とも書いてあります。これを見ると、本府があって、その

前に役宅があって、前図には「本町」と書いていましたが、ここでは「大町」と書いています。その部分は前図と同じと私たちは考えています。呼び方がちょっと変わっているだけです。もしかすると、島とは違う人が作図したものなのかもしれないし、描いていくうちに、まだつくってないまちですから、本町にしようか大町にしようかとか考えながらそれぞれ描いてみたということも考えられます。

この全体を説明しますと、下に正南と書いていますので、こちらが南で、上がおおむね北に当たると思いますが、絵図面ですので正確ではありません。西のほうに海とあり石狩湾のことです。上のほうに石狩という地名と大河とあり、大河は石狩川です。お若い方はぴんとこないかもしれませんが、もともとは石狩川の河口部が石狩の本来のまちです今ですと、石狩のまちは花畔から花川にかけての札幌市に隣接したあたりのように思えますが、四、五十年ぐらい前までは、石狩と言うと河口部をさしてました。図中の「石狩」と画いてある辺りが石狩のまちだったということです。



⑩石狩大府指図

左側の一番下のほうには銭函があります。銭函もおおむね今の位置です。石狩や銭函から点線が描かれているのがわかると思います。皆さんの地図では黒い点線ですが、実際の図面では赤い点線になっています。これは道路です。恐らく島が街づくりを始めたころにあった道路だと思います。先ほどから話が出ている千歳越新道とか札幌越新道という道路は、石狩から海岸を通過して銭函へ来て、そこから手稲の山裾を通過して大町を抜けていくルートが札幌越新道です。東南の部分はこの図から外れて勇払（今の苫小牧）まで行っています。

手稲の山裾を通過している道路から脇道が描かれていますが、この道路の位置関係は多分間違っていると思われるのですが、札幌越新道から分かれた道路が平野部の方を通過していたようです。

もう一つは、石狩から川沿いに来て、「志野呂」と書いてあるところを通り、そこから今の東区を通過して札幌の街中に来るという道路が描かれています。その途中に「開墾村」と書き込まれています。

この地図を見ますと、点線の道路が本府のある街と結びつくように描かれています。それと、図の右下に「千歳江之道」、「室蘭江之道」、「有珠江之道」という三つが描かれています。これらは、先ほどの詩に象徴されているような「四通八達」の部分だろうと思います。実際にこの時点であった道路は札幌越新道とその脇道くらいだと思います。「千歳江之道」が千歳を抜けて苫小牧へ行く道路ですので、いわゆる札幌越新道と同じものでしょう。それ以外に、「室蘭江之道」

とか「有珠江之道」もつくろうとしていたと想定できます。

「有珠江之道」は、明治3年、4年になって東本願寺が札幌から平岸を抜け、定山溪を通り、中山峠を越えて有珠へ向かう道路をつくりまします。本願寺街道と言われる道路ですが、そういう形で実現します。「千歳江之道」つまり札幌越新道に関しては、明治5年、6年に札幌本道という函館から札幌までの道路としてつくり直します。もう一つは、「室蘭江之道」です。これは、南区の芸術の森から南へ山間部を抜けて、支笏湖を通って、オロフレ峠を越えて登別方面に行ったりするルートです。そういう四通八達のための交通路も想定した図面になっているわけです。

さらに図中下部に「御宮」と描かれています。先ほどの昔話で丸山神社のあるところがコタンベツ言っているといたしましたが、ここがコタンベツになるようです。島が決めた場所が、そのまま札幌神社がおかれ、今の北海道神宮になっています。

その脇に小さく「温泉」と書いていますが、定山溪温泉のことです。定山溪温泉は幕末には発見されています。松浦武四郎の紀行文を見ると、中山峠から下ってきて、定山溪温泉のところでお湯につかって温まったことを書いてあります。

その他にも細かく見ていきますと、ここに「小瀑布」と書いてあります。小瀑布ですから滝があったわけです。今のどこかというところ、動物園のあるあたりです。明治40年代に円山公園をつくろうというときには、その滝を利用しようという計画でした。おそらく、円山動物園をつくったときに滝そのものもなくなってしまったのでしょう。それとも、あの辺の沢を歩いたらまだあるのかもしれませんが。そのようなものも描かれています。

その次に見ていただきたいのは、この銭函方面からの道路から分かれた道路沿いに発三（発寒）村、琴二（琴似）村、上の石狩からの道路沿いには志野呂（篠路）村、開墾村と描かれています。開墾村というのは、後の札幌村（札幌元村）のことで、大友亀太郎が慶応2年から開拓をしたところです。

幕末になると、対ロシア問題を意識して石狩平野で事業を開始します。それがこの四つの村です。箱館奉行所の出先機関として石狩に石狩役所を置き、石狩を開拓するために農民を入植させます。それによってできた村がこの四つの村です。

琴似村と発寒村の二つは在住開墾などと言われています。江戸幕府の旗本、御家人の次男、三男、もともと跡の継げないような人たちに在住という役職を与えて、その在住の役職の給料を使って農民を雇って開拓をしようとしたのです。

篠路村は、石狩役所の役人で荒井金助という人が篠路の開拓を始めます。有名なのは、早山清太郎という人が荒井金助の指令で篠路に住み開拓を始めるといいう話が残っています。在住開墾が安政4年開始と言われているので、琴似村と発寒村は安政4年だろうと言われている。篠路のほうは早山清太郎が荒井金助の命令で住み始めたのが安政6年と言われている。

それとは別に、慶応期になって大友亀太郎という人が箱館奉行所の命令により開拓を始めるのがこの開墾村です。わずか数年しか変わらないのですけれども、琴似村と発寒村は、先ほど言ったように、在住が自分の給料の中から農民を雇って開拓を進めるものです。それに対して、開墾村は御手作場とも言いますが、幕府、

実際には箱館奉行所ですが、経費を出して大友堀のようなインフラ整備をした上で開拓を進めました。ほんの数年しか違わないのですが、開拓の進め方が違う村が四つあるということです。

島は、そういう村のあるところに街（札幌本府）をつくろうとしたと私は考えています。候補としては、近藤重蔵の時代からこのあたりは挙がっていたわけですが、最終的に具体的にここにしたいというのは、島だったり、先ほどの昔話に出てきた通り島の部下が、ここが最適な場所だということで決めたのだと私は思っています。これは別にホオズキかがたくさん生えていたからではなく、これらの村があったからだと思います。

島判官が造ろうとしたのは都市です。それに対して村々は農村です。経済関係といえますか、街で消費するもの（食料）をつくるような村落を周辺に配置する。また、そういうところに街をつくろうとしたと考えられます。

その考え方を一つ補強するのが、資料⑩『石狩大府指図』にある豊平村です。豊平村は明治7年にならないとできません。島は、実は10月12日に銭函に来て、すぐに部下に「豊平開墾」という事業をさせます。その帳簿が残っているだけで実態はわかりません。しかし、この豊平村という名前とその帳簿にある豊平開墾という名前から考えると、ここを開墾しようとしたのだらうと考えられます。

帳簿に載っている経費を見ても、特別、木を切り倒してどうこうするという事はわかりません。購入したもので目立つのは縄です。縄というと、街割するときや家のブロックを決めるときに杭と縄で囲ったという話が残っていますから、豊平開墾でもそのような地割りのための経費を記入した帳簿かもしれません。まだその程度のことしかわかっていませんが、この名前とその帳簿の関係を考えると、ここに新たな村を置こうとしたのだらうと思っています。

島判官の移民募集

実際に、島判官は自分の部下を東北地方、北陸地方に送って移民を募集しています。それが資料⑩-1の史料（『部類抄録』道文A3/356）です。酒田県宛のもので、札幌あたりの開墾を大々的に進めていくので移民300人を募集したい、と書いています。酒田県ですから、今の山形県のことです。

この史料を見ると、移民を募集するときの条件として、お金などを支給しています。出発当日からの賄い、支度金、着いた後は家1軒など、そんな条件が書か

資料⑩-1

酒田県への移民募集に関する指令

今般当使本府石狩へ御取建ニ付札幌辺追々開墾ノ積就テハ羽後国ノ内ヨリ農民男女三百人程移住為致度此段申入候也

巳十二月

開拓使

酒田県御中

移住御手当向凡

- 一出立当日ヨリ御賄被下候事
- 一支度為御手当男女小兒共一人ニ付金三兩位見計被下候事
- 一場所着ノ上
 - 一家 一軒
 - 一鍋 二枚
 - 一蒲団一人ニ付二枚ツ、
 - 一日金壹朱ツ、
 - 一玄米一人ニ付五合ツ、
 - 一農具被下

右米金ハ三ヶ年ノ内被下候積尤其人ニ寄見込次第御手当差略ノ事

（『部類抄録』北海道立文書館所蔵 請求番号A/356）

れています。このようなことから考えると、募集したときには、裸一貫で来てくださいに近い条件になっています。

資料⑫-2 (『柏崎市史資料集 近現代編 2 柏崎県史資料』昭和57年刊)は、最近見つけた史料ですが、部下が新潟県の西部にあった柏崎県でも移民募集を行っています。募集の条件については同じことを書いています。「開拓史よりの布達」となっていますが、「開拓使」の誤植です。開拓使から柏崎県内の庄屋へ宛てた指令です。

今で言うと山形県、新潟県で移民を募集したということです。実際にこの時に募集した移民たちは札幌に入植してきます。明治以降に札幌へ入植した最初の移民がそれらの団体になります。

実際には、それ以外に岩手県や宮城県のほうにも移民募集に行きますが、途中で中止指令が出たのでその人たちは来ませんでした。柏崎や酒田で募集した人たちだけは中止指令を届く前に船に乗せて送り出していたので、中止にはならず、春には小樽に到着して最終的には札幌に入って、今の丘珠・苗穂・円山と先ほどの札幌元村の脇に札幌新村というのをつくりま

田畑切り起こし人の募集

島は、こうやって移民を募集しますが、これだけではなく、資料⑫-3 (『諸留』北海道大学附属図書館所蔵)のように盛岡藩に対して、田畑切り起こしの人夫調達の指示を出しています。

皆さんは、北海道開拓というと、通常のイメージとして、開けていない大森林の中分け入って自分のもらう土地まで行って、木を切り倒し、その後畑を耕して作物を植える。それが開拓だと思っておられると思うのです。でも、これを見ると違うことが推察されます。この資料には、「北海道石狩国札幌郡江本府造営相成、総テ西地向開墾盛ニ被行候ニ付而は、田畠切起人足御用ニ相成候条、右人足御雇相成度、来二月中旬迄ニ札幌本府江差越相成候様手配可有之」といっています。田畑切り起こしですから、おそらく田畑を切り起こすためには、木を切り

資料⑫-2

開拓史よりの布達
記
柏崎市史資料集 近現代編 2

一 出立の節、支度為手当、男女・老幼の無差別、一人ニ付金三兩宛被下候事
一 当港出帆、風待の日より航海中共御賄被下候事
一 彼地着の上、一日一人玄米五合、一戸工金老米宛、凡三年ノ間被下候事
一 妻子等召連候ものへハ家老軒被下、単身の者ハ兩三人、或ハ四五人工老軒被下候事
但一人ニ付ふとん式枚、一戸へ鍋式枚ツツ御渡シの事
一 農具一式ハ御渡の事
右の通ニテ、開墾規則ハ往地着の上可申渡候、尤銘々所持の夜具・農具・鍋釜の類持越し候ものへハ別段御渡し無之、相応御手当可被下候事
明治三庚午年二月 開拓使 庄屋工

本文の趣、小前未々迄無洩可申聞、尤日数差争ひ候事故、刻付を以相廻し留より返却可致、且貧民ともハ別テ文字も分り難く候間、庄屋其上重立の者より委く申聞セべく、甚た遺憾申出候者有之節は、所役人の越度候、此段厚相心得可申事
二月十八日 柏崎県 御役所 郡中惣代 町年寄へ

資料⑫-3

盛岡藩に田畑切り起こしの人夫の指示
北海道石狩国札幌郡江本府造営相成、総テ西地向開墾盛ニ被行候ニ付而は、田畠切起人足御用ニ相成候条、右人足御雇相成度、来二月中旬迄ニ札幌本府江差越相成候様手配可有之、此段申達候也
巳十二月 開拓使
盛岡藩役人中
(『諸留』北海道大学附属図書館所蔵)

倒してそれなりの空間をつくり、そして田畑をつくる、その人夫を募集しているのです。さらに2月末までに札幌に到着するように指令を出しています。先ほど募集していた移民は大体4月から到着するのですが、それから推察すると、移民たちが来る前にある程度切り開いて畑をつくっておき、そこに移民を入れることになります。島は、先ほどの話のように、村があるところに街をつくりました。さらに、村をもっと充実させるために、入植したらすぐ農作業ができるように、ないしは移住が成功するように手だてを組んでいるのです。早いうちに札幌の中心の街と周辺の村々との経済関係がうまく回るように、こういう募集をかけた政策を進めていると考えられるのです。

島は、いきなり何となく札幌へ来て、松浦武四郎があそこと言ったからここへ決めたということではなくて、以上の様な意図を持って、既存の村があるそばに街をつくらうとしたと思われまます。

島判官は、明治3年2月初めに札幌からいなくなり、開拓使は馘首になってしまいます。その後、岩村通俊が4年になって街づくりを再開します。その途中、明治3年7月になると、街づくりするより先に農民を入れ農村をつくらうという指令が開拓使から出ます。その命令そのものも島の構想を証明しているように思います。つまり、島がした様に早急に街を維持するために村をつくるのではなくて、まず村をつくった後に街をつくらうという様に変更したのです。それだけ、島は急いでいたということなのかもしれません。

移民の入植と本府札幌

明治4年から街づくりを再開して、資料⑫-4『札幌郡西部図』（北海道大学附属図書館所蔵）は明治6年の札幌の地図です。明治



資料⑫-4『札幌郡西部図』

6年ぐらいになると、明治4年から始めた碁盤の目がちゃんとできてきています。豊平川や伏古川なども描かれています。図中に朱線と朱点があり、朱点は家を指し、朱線は道路です。碁盤の目から南東に向かっている朱線が札幌越新道にあたりますが、明治6年11月ですので、函館から札幌につづく道路がつくられて札幌本道と呼んでいます。その道路は今の国道36号の原型になります。おおむね、後の村に当たるようなところが大体出てきています。篠路、丘珠、元村、苗穂、雁来、新白石（今の菊水のあたり）、白石、白石の中を通っているのが今の国道12号の原型です。その両側に白石の人たちが入植しました。横町、月寒、平岸街道があつて平岸、西側のほうは南1条通の西部は円山、二十四軒、八軒、琴似、発寒、手稲村で、まだ下手稲は村になっていません。

明治6年になるとこのように移民たちが入植し、恐らく、この中心部の街との関係を充実させていこうとしているのだらうと思います。その辺を示す資料が次

の資料⑬の表（『庁下戸籍職分寄留惣計調』道文668、『新札幌市史 第六巻史料編一』所収）になります。これは明治6年の戸数と人口を示したものです。ちょっと言葉が難しい部分もあるのですが、大項目を「戸数」と「人口」にわけ、それぞれの項目を見ていきます。

一番上が第一大区です。今の札幌市と北広島市と江別市を札幌郡と言うのですが、そのころは第一大区とも言っていました。この第一大区のところには戸数が1,

174戸、人口は3,501と書かれています。これは、この当時の人数の数え方で、本籍人口です。また、その次の項目が「寄留」と書いています。寄留は、今で言うと、本籍を移さないで住民票だけ移す方がいますが、そういう人たちです。

資料⑬

明治6年頃の職業調べ

	戸数							人口						
	農	工	商	雑業	官員	土人	農	工	商	雑業	官員	他	土人	
第一大区	1,174						3,501	571	108	263	102	12		
寄留	135						4,717	107	2,493	342	202	187	504	
市街	567						1,256							
村	611						2,245	562	1	4	18		9	
田山村	46	45					164							
琴似村	57	52				3	200							
登美村	25	16				5	90							
平岸村	63	63					198							
白石村	104	104					358							
月寒村	47	43			2		201							
手稲村	95	58		4	14		290							
対馬村	20						88							
札幌村	52	49	1			1	227							
苗穂村	40	40					148							
丘珠村	30	30					106							
穂路村	46	46					177							
村計兼合計	625	546	1	4	16	9	2,245							

〔明治六年六月編成 庁下戸籍職分寄留惣計調 戸籍課〕〔北海道立文書館所蔵668〕より
*「人口」中の「他」は、神官3、僧9、修行人5、奉公人461、准流6、徒隸13、外国人7の合計

寄留には、第一大区に本籍を置いているのだけれども、本籍を残したまま違うまちに住むような人、札幌から出ていくような人を出寄留といいます。逆に、ほかのまちに本籍を持っていて、本籍を移さないで自分の住むところだけを札幌に移すという入寄留の2種類になります。当時の人口の数え方ですが、本籍人口と入寄留と足した人数になっているようです。そのため、実際の数よりも幽霊人口がいる形になっています。

戸数が1,174で、市街と村で567戸と611戸です。市街というのは、札幌の中心部で、先ほどの島がつくったまちの部分です。それに対して、周辺には12ヶ村あって、村の合計は611戸あったと見えます。この場合の数字はどうも寄留は入っていないようです。

この資料は、農業、職人、商人、雑業、役人、土人の数を調べています。村のほうを見ますと、ほとんどが農業ということになります。人口を見ても、第一大区全体で農民は571人となっているのですが、その内村で農業をやっている人は562人となっています。ただ、これは、一家の一人だけの数字でないかと思えます。それから、村の職人や商人、それに雑業などはごく少数なのがわかります。第一大区では、表の右側の「人口」の方を見るとこんなにいるのに村々の職人や商人は極少数と言うことがわかります。そうすると、こんなことがわかります。村のほうにはほとんど農民、それに対して市街地のほうには職人だとか商人の人たちがいるということです。これは、先ほど言った消費都市と周辺の食料生産の関係が見えるということです。ただ開拓初期のこの時代にちゃんと動いているかどうか、食べ物が足りるかどうか、など不明です。恐らく足りてはいないだろうと思えます。しかしそういう関係がつくられているということがこういう資料からわかってくると思えます。

島は、経済関係的なことを考えて街づくりを始めます。その後も、開拓使は一時的な中止はありますが、それと同様な政策・事業を行います。

全国的な話をしますと、明治4年か5年ぐらいから、殖産興業政策というものが始まっていきます。殖産興業政策の典型例で有名になったのが富岡製糸場です。最近、世界遺産になりましたが、殖産興業政策の目玉商品として機械製糸技術を伝習させるためにつくった工場です。

似たようなことは、札幌でもやっています。資料⑩『札幌市街之図』（北海道大学附属図書館所蔵、『さっぽろ文庫別冊 札幌歴史地図＜明治編＞』）は札幌の中心部の図面で、明治11年の地図です。図中今の大通の東側のあたりは殖産興業政策でつくられた工場がたくさんあるところですよ。今のサッポロファクトリーもこの中に含まれます。ファクトリーは明治30年代につくられた赤れんがの建物ですけども、開拓使時代は同じ所にビール工場がつくられます。その後、民間に払い下げられ、建て直されて、今のれんがの建物になります。その他にも木工場、製鉄所などの工場群をつくっていきます。

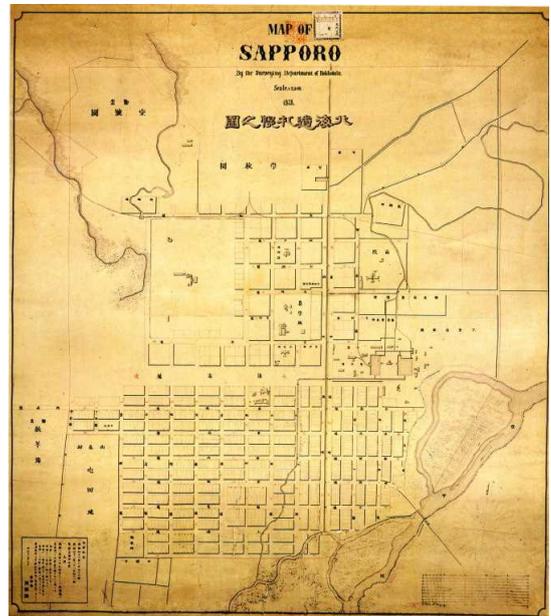
全国的な意味合いでの殖産興業政策というと、模範工場を造って技術を伝習し、それを地方に広げていくことが役割の一つですが。北海道の場合というか札幌の場合と言ったらいいのでしょうか、開拓使では、工場でする原料を移ってきた農民たちにつくらせて、それを買い取って、工場で加工をするという関係をつくっています。例えば移民たちに養蚕を奨励します。養蚕でできた繭を開拓使が買取って、製糸場で生糸をつくっています。後には糸だけでなく紡織場にして布地をつくることまでします。他には、小麦や大麦をつくらせて開拓使が買入れ、小麦は製粉場で粉にしたようです。大豆、小豆などもつくらせて、大豆のためには醤油醸造場などもつくっています。

明治5年、6年ぐらいから移民たちに、つくった小麦、大麦、大豆を買い取るから、いついつにどこそこへ持って来る様にとという指令を毎年出します。そしてその年の相場をはかって買い取っています。それ自体も経済関係を示しています。

その様なことにはもう一つ意味合いがあります。先ほど、移民を募集するときいろいろな支給品があるという話をしました。移住してしばらくするとそれらの支給はなくなるのですが、開墾が進んで農業生産が行える様になると、農民たちがつくったものを買うようになる。それは、農民たちの生活の扶助、補助にも当たるだろうと思います。

全国的には、富国強兵政策をとりその手段としての殖産興業政策をすすめ、工業国化し、先進国への仲間入りをしようしていました。内務卿の大久保利通それ

資料⑩



▲⑩、北海道札幌之図(明治11年)(北大図書館北方資料室蔵) 解説27頁

らを推し進めていました。開拓使の黒田次官（後に長官）が大久保利通の後輩にあたり、その考え方を取り入れています。札幌（北海道）の場合は、それに加えてもう一つ別な意味合いの経済関係である生活扶助といった考えもあって、札幌周辺の開拓が進められ、中心部の札幌の街も形づくられていくのだろうと思っています。

ということで、開拓の本拠地の場所が決まってきた、そこにどんな街をつくらうとしていたか、そこに経済関係みたいなものが殖産興業政策の中で少しずつ形成されつつあり、そのもう一つ側面が扶助政策でもあるというお話をして、きょうの私の話は終わりにしたいと思います。

質問 1

計画を立てて数年の間にすごい勢いで村ができていたり、スピード感が半端じゃないなと思うのですけれども、その当時の人たちの人数のパワーでそんなに進んだのでしょうか。それとも、効率は今に比べれば機械もないし全然遅かったと思うのですが、その当時の日本人の労働力のパワーの大きさといまいますか、現代人はちょっと仕事をしただけでへたっちゃいますけれども、その辺はどうなのでしょう。

○榎本　すごく難しい質問で、答えにならないかもしれませんが、例えば、開拓使とか札幌県時代、明治20年ぐらいになるまでの間というのは、北海道、特に札幌周辺は特別な時代だったと思います。札幌を中心に投資をするのですが、それがなぜかということです。一つは対ロシア問題があって北海道の開拓を進めていくことです。江戸時代ですと、開拓をしないでただの原野・原始林ばかりにしておけば産物があるわけではないので、占領しても税金を取るための畑などがないことになり、そのほうがロシアは来ないのではないかという考え方をしていました。それに対して、幕末ぐらいからは、生活空間として蝦夷地を確保してロシアが入り込んで来ないようにしようという考え方になるのです。それに関する危機感があるだろうと思います。

ただ、その場合は、明治8年に樺太・千島交換条約で国境がはっきりして、解消されます。疑心暗鬼の部分はあるかもしれませんが、形上は解消されます。

もう一つの考え方は、日本の近代化モデルという位置付けです。当時、日本の政府が持つテーマの一つが不平等条約の解消です。そのために、日本全体を先進国のように進歩させていかなければなりません。それで殖産興業政策がとられ、新しい西洋の工業技術を取り入れていくのです。その考え方で北海道を見ると、何にもなかった原野に札幌という近代的な街をつくり、近代的な工場を配置し、農業でもヨーロッパのように馬を使って耕すすきなど西洋農具を導入して、日本のそれまでのおくれた農業技術を改善させようとしています。東京方面のお雇い外国人がわざわざ札幌へ視察に来て、札幌はこんな街だという報告をしています。フランス人のブスケという人は、非常にきれいなまちで近代的なまちだと、紀行文に書いています。ただ、おもしろいのは、豊平川沿いをツイシカリあたりから歩いてくるのですけれども、その街の直前までジャングルでそれを抜けると、いき

なり近代的な街だったというように記しています。

そういう意味でいくと、国策として札幌を中心に投資をして、日本の近代化のモデルの一つとして札幌の建設と周辺の村づくりを進めていったことが一つの意味としてあるだろうと思います。

質問 2

札幌本府のいろいろな図面を初めて拝見したのですが、その中で一つの対比として佐賀のまちをお見せいただきました。鍋島がそういうことで影響したとか、実質的に何かの仕事をしたということはあるのでしょうか。

○榎本 開拓使の初代長官が鍋島直正（閑叟）ですが、『新北海道史』などには鍋島直正は対ロシア関係で危機感を持っていたと書いてあります。しかし具体的に何と言っているのか、いろいろ史料を探したのですが、私はまだ見つけていません。実際に開拓使ができる前から、鍋島閑叟さんは体調が悪く、4年の初めに亡くなってしまいます。それでも、意見力はかなりあったようで、それを島義勇が利用したということはあると思います。直正が主張した開拓案が紹介されているのは今のところは見つけていません。具体的な政策として『新北海道史』のような研究書の中にも描かれていないようです。私が知っているのは、先ほど言った対ロシアに関する危機感を強く主張した大名という言い方で登場している程度です。恐らく、鍋島直正の意見が効くのは、佐賀藩が製鉄業などの先進的な技術を持っていて、藩そのものが幕末から開明的な藩だったそうですが、幕末にはほかの天皇方の藩や幕府が、佐賀藩に大砲を注文するほど先進的な技術を持っている藩だったようです。しかし、具体的に蝦夷地問題ということになると、島義勇を幕末に蝦夷地探検に送ったということは出てきますが、はっきりと言葉で蝦夷地（北海道）開拓についてどうすべきであると言ったものは、私はまだ見たことはありません。

質問 3

札幌の成り立ちについてお伺いしましたけれども、要するに、港を持たない札幌ですね。いろいろな都市の発展には必ず貿易港あるいは交易港を持っている都市の発展が世界的に有名ですが、なぜこれだけの交通の便の非常に悪いところを選んだのか、それについて理解ができませんでしたので、簡単にご説明をいただきたいと思います。

○榎本 多分、島が四通八達という言葉が出てくること自体、その辺を考えていたということなのだろうと思います。小樽をどういう位置づけにしたかというのは、京都との関係の話でも出てきています。それを島そのものがどう考えていたかは全くわかりませんが、札幌というまちは、それをその後もテーマにしています。例えば、幌内炭鉱鉄道が明治13年に開通し、15年には幌内から小樽の手宮まで開通します。明治20年代に滝川方面や上川方面の開拓が始まって鉄道路線もそちらに伸びていくと、小樽でおろした荷物は札幌を通過して、皆、奥地に行ってしまうのです。そのため札幌にメリットがないと言われていたときもあります。その中で、明治の末とか大正の初めに、都市のあり方、都市論みたいなものが新聞などに登場します。その中には、「政治都市」というのが一つの発展

の要素になるという意見を出す人もいます。

それとは別に、大正の初めには経済的な面での意見を載せる人も出て、札幌に港をつくって、今の新川を掘り広げて物資を小樽で積み替えないで、札幌まで持ってくるようにするという意見も出ます。明治末や大正になってもそのようなことがテーマになっています。島の詩をかりれば、四通八達していければというのは、その意味合いを案外認識していたのではないのでしょうか。

質問 4

開拓使がアイヌとスムーズに争いなく札幌に決められたというのはどういう要因なのでしょう。和人とアイヌでは過去の中では争いがありましたね。ところが、開拓使には、アイヌとこういうような抗争があったというのは余り聞かないのですけれども、どういう要因で札幌を決められたのでしょうか。

○榎本 例えば、札幌の選地の話でいきますと、松浦武四郎が札幌周辺のアイヌの人たちと相談をして決めています。

私は、アイヌの人たちの歴史をほとんど何も知らないので暴言になってしまうかもしれませんが、例えば、寛政の国後騒動的なもの以降は、ほとんど小競り合いもなく和人たちの支配の中で動かざるを得ないアイヌというふうになっていると思うのです。そういったときの19世紀、60年代のアイヌの人たちというのが、例えばそういう反発ができるかどうかですね。寛政の国後騒動をやったときのエネルギー的なものはないのではないのでしょうか。

当然、自分稼ぎで漁をしては生活を自分たちで見えていますけれども、生活のかなりの部分というのは場所請負制の中での生活に規定されているのではないのでしょうか。

以 上